

目的 高度経済成長期を経て生活水準の上昇，生活の外部化ほどにより，家庭生活は著しく向上した反面，生活の同質化・画一化が進んだ。本研究では，このような変化が住生活様式にどのような変容をもたらしたのかを探るために，都市近郊の農村型住宅を対象に，住居に投影されている家族の住まい方の変容過程を分析することを目的とする。

方法 埼玉県，群馬県，山梨県の都市近郊の農村型住宅を対象に，訪問面接調査により問取りの採取及び生活歴に伴う住まい方の変化を調べた。調査期間は昭和60年10月～11月及び昭和61年6月～8月である。

結果 問取りの変容と生活歴とを対応させると，子供の成長や結婚に合わせて住宅更新を行っている。就寝空間には，プライバシー確保の意識を反映し，家族観や就業形態の変化が加わり，独立性・固定性の高い空間を形成している。かつての家長権の移動に伴う，寝室交替のサイクルは乱れてきているといえる。公的空間については，接客よりもだんらんを重視する傾向がみられ，家族の意識が変化している。だんらん空間には伝統的な茶の間指向が，接客空間には続き間指向が強く残っている。しかし，近年では，都市型生活様式の影響により，世代ごとにだんらん空間が分化するという問題も生じている。家事労働空間は，台所の改善，合理化が進み，DKが普及してきている。それに伴い，婦人原理も変化してきたが，都市に住む女性達とは異なり，た意向を示している。農村型住宅では長期にわたって一定の土地に定住し，家の系譜を継続することによって培われてきた生活習慣や価値観が現在の住生活を規定する要因としてやはり作用している。